



県立博物館で 仏像の勉強をしてきました

公民館 だより

No.378

10月6日(月) 高齢者大学郷土探求クラブは郷土探求の活動の一環として、県立博物館で仏像の勉強をしてきました。参加された方から投稿がありましたので紹介します。

仏像には大きく分けて如来、仏像、明王、観音とあります。そもそも仏像の始まりは、紀元前5世紀頃インドのヒマラヤ南の麓で仏陀が誕生しました。仏院は釈迦族に由来し、釈迦族の聖者という意味で尊称して釈迦牟尼世尊、略して釈尊と呼ばれています。彼は、釈迦族の王子でしたがその身分を捨て約6年間の苦行に励み、骨と皮にやせ細った苦行僧となって菩提樹の



【重文 木造薬師如来立像】
(京都市・因幡堂蔵)



【重文 木造薬師如来立像】
(岐阜市・延算寺蔵)

当時の仏像の模刻(一木造)を唐で作らせ平安時代の留学僧の奄然(ちようねん)がその模刻像を唐(中国)から985年に日本に持ち帰り清涼寺(京都府)に納めたのが始まりです。清涼寺式釈迦如来として盛んに信仰されました。

如来とは、人々を救うために真理の世界からやってきて悟りを開いた人で仏様とも釈迦如来ともいいます。

菩薩とは、悟りを求めて修行しながら救いを求める人を救済する。

明王とは、教えに従わない者をこらしめる。インド渡来の怒れる神々である

観音とは、悟りを求めて修行

下で坐禅を組んで瞑想し悟りの境地に到着したのが35歳、その修業時代の姿や説法をする姿、80歳で入滅した涅槃の姿などが仏像の原形となりました。インドに留学した玄奘三蔵(げんしょうさんぞう)こと西遊記の三蔵法師が

しながら世の中の人々の声(音)に耳を傾けそれを聞き(観る)自由自在に人々の声を聞いて助けるなど、仏様にもそれぞれの役目がある事等を勉強して望んだ博物館の見学は仏と人間が深く関わっています。これが佛縁(ぶつえん)というものなのかなあと感じました。

11月のセンスアップ講座

プレイパークいわみ

和の心を学ぼう

11月22日(土)のプレイパークいわみでは、お茶の作法を体験するなかで和の心に触れてもらおうと茶道を体験する会を開催しました。

会では、お茶室について、礼の仕方、お菓子やお茶のいただき方、茶道で大切にされていることなどさまざまなことを教わりながら、実際にお茶を点てました。静かな空間で心を落ち着かせて、日本人が培ってきた文化を体験することができました。



岩美川柳会

そろそろとすり足で舞う能舞台

山下 節子

千羽鶴春はそろそろ退院か

岡本 幸枝

団塊の余生そろそろ夢を描く

田口 清帆

ユニークな落葉手にする秋の色

飯野 昌子

姑さんに知らぬふりして嵌められる

小西 幸安

篤姫に嵌り歴史を読み直す

羽津川公乃

飯の世に生きて仁義のむつかしさ

石谷美恵子

飯の世を馬鹿になりきり生きて

山田 たぬ

本物は来生なのさ今は仮

北村 稔

出征へ仮祝言はそれつきり

山下 蟹朗

飯縫いのままで未完の夢を追う

石谷 忠良

松かさ短歌会

南天のつぶら実赤く色づきて朝の目を浴び庭を彩る

井筒三重子

銀杏を拾っていると手袋をどうぞと笑顔に渡しくださる

稲村 信枝

夕映えに染まりてとんび悠々と円を描きてわが畑の上

岩垣 明美